

陸軍兵は「一時間以内に乗船完了せよ」。二隻の巨艦は二十時ザンボアンガ港をたった。

外海に出るや船首甲板に波を乗っけるばかり三十ノット以上の猛速で一直線にぶっとばし、陸兵たちは目まいと船酔いを繰り返した。かくして翌二日いよいよ敵機動部隊と戦闘にはいる。第一次渾作戦である。

戦争とは

神奈川県 斎藤 芳郎

「あつたよ あつたじゃないか」

それは、私たち通信隊員数人が、高さ十メートルほどある崖を必死の思いで登り切り、森林のはしにはいりて攻撃目標の「ワウ市」及び飛行場を数キロ前方に望見出来た時の喜びの叫びであった。昭和十八年一月二十七日正午のことである。

その時、私たちはすでに食糧もつきはてていたうえ、睡眠不足で「死んだ方が楽ではなかるうか」と思うほど

疲労こんぱいしていた。けさから敵機の銃撃により部隊行動ができないため、数人ずつ分散し、散在している竹藪などに身をひそめつつ前進していたので、岡部支隊もバラバラになってしまい、支隊長の岡部閣下すら見失ってしまった。

眼の前に見えるワウ市及び飛行場は南国特有の太陽に輝き、先ほどまで銃撃していた敵機や、間断なく離着陸していた輸送機も消えうせ、牧場の牛がのんびりしている平和境そのものであった。

げんなりしてしまった私たちは「早くワウを占領し、食糧をさがしだそうや、今晚の不寝番は一人にしようぜ」などとブツブツいいながらワウ市にのびている砂利道を前進して行った。

それは去る一月七日、敵機の空爆下「ニューギニヤ」の「ラエ」に上陸し、じらい、磁石をたよりに二週間分の食糧をけいこうしたのみで、ジャングルをはいまわり、ワウ市及び飛行場の攻撃に向かった時であった。攻撃の主力は水戸の百一連隊で岡部少将を長とする岡部支隊であった。

そして今、前方にワウ市を望見出来たのであったが、本朝、明けがたごろ、東北方でけたたましい銃砲声が出ていたのは友軍の攻撃であろうと思ひ、静かな今頃はさぞワウ市を百二連隊の主力が占領し終わったのではないかとばかり思ひ込んでいた。

私たちが砂利を数百メートル前進した時、突然前方から猛烈な銃撃をうけてしまった。とっさに私たちは砂利道の左側に掘ってあった深さ一メートルほどの排水溝のなかに飛び込み、一列に伏したまま身動きも出来なかつた。

私たちより先行していた田中中佐、赤羽根大尉たち数人がどうなっているか連絡のしようもなく、確認することもできなかつた。

間もなく地上銃撃のほか山砲弾も撃ち込まれ、さらに飛行機による銃撃も加わり、私たちはふりおちる土砂で呼吸すら困難になってしまった。

「もう駄目だ、もう駄目だ」

と思いつつ死の瞬間を待つ心境は恐怖のドン底であった。括約筋が役に立たなくなり、無意識に大小便がたれ

ながしになり、股が暖まっては冷え、冷えてはまた暖まっていた。昼頃のあのおだやかな天気が夢のようであった。耳はガンガンとなり、のどからは血が出そうにかわききり、私たちはもはや生きる望みを失い思考力も消え果て、ひたすら阿弥陀仏をとなえながら死の瞬間を待っていた。

すると、芋虫のような格好で私の前の者を押しつぶしながらやって来た者がいた。私は

「誰だ動くんじゃない」

と叱りながらみると、永岡軍曹であった。彼は唇をふるわせながら

「駄目です、ムチャクチャにやられてしまいました。誰がどうなっているのかさっぱり判りません」といつつ私を踏みつけて必死の形相でもどって行ってしまった。しばらくして通信隊の黒沢上等兵が血だらけになってやってきた。間もなくもう一人がやって来たが、私の眼の前で鉄帽に貫通弾をうけて即死してしまった。岩田曹長であった。

辛うじて日が暮れる夕刻の八時、やっと銃撃が終わり

元の静けさになった。僅かに半日の一刻一刻が、こんなに永く感じたことはなかった。またこの時ほど生死の間をさまよったこともなかった。しかしたしかに生きている。生きているのが不思議であった。

日の暮れるのを待って、私たちは土砂を払いのけ、砂利道にはいあがった。皆放心したように足元がフラフラしてあたかも幽霊のようだった。私は「皆んなシッカリしろ、大丈夫だ、生きているぞ」とはげましたが、誰も腰が抜けてしまったようにフワーと立っているのがやっどであった。私は「さがるぞさがるぞ」と小声で知らせながら、とにかく司令部主力がいる所まで後退することにした。誰も糞便にまみれ、泥まみれであった。負傷者は血だらけになってウンウンうなりながら「痛い痛い」とうめいていたが、手当は後退してから行うことにして、白く浮きあがったようにみえる夜道を助けあいつつヨタヨタと後退していった。

三百メートルほどさがった溪流のなかに、小林中尉の指揮する司令部の主力がうずくまっていた。そして先行していた者たちの死体を收容するためその人選している

ところであった。

その結果、比較的元氣な暗号班長の小保方中尉が收容隊長、私が道案内役になり、総人員十五人が静まり返った砂利道をふたたび元の所まで前進していった。ともかくさぐりあてた死体を持てるだけ持っておのおの帰ることにした。また一切無言のままに收容することにした。私がさぐりあてた半分ちぎれてしまった死体は閣下のものであろうと思った。かくしておのおの持てるだけの肢体を、あるいは背負いあるいは引きずりながら帰って来た時は、すでに二十八日の午前三時であった。

死体の認識票等遺品を集め、戦死者を仮埋葬し、ワウ市占領後あらためて埋葬することにした。死体を確認してみたら将校は田中中佐、赤羽根大尉、増淵中尉の三人、下士官は野口曹長以下五人、兵は計八人の合計十六人の犠牲であった。

私が閣下のもものと思い込んでいたのは野口曹長であった。たしかに先行していたはずの閣下の死体が発見されなかったのが不思議であった。

それにしても半日の間に、司令部すらこれだけの戦死

者を出すようでは、一体この先どうなるのかと胸をしめつけられる思いであった。ともかくジャングルのなかにひそみ下村大尉が先行したあとをさぐりあて、前進することにした。そうしているうちに、数人の部下と共に休息していた閣下を発見することができた。

かくして二月にはいるや、ついに支隊主力も兵力が半減してしまい、もうそれ以上の攻撃は不可能になってしまった。

生き残った者は掘りあてた芋をかじりつつ、幽鬼のような姿になりはててワウを撤退することになってしまった。生きている者として自分の体を運ぶのが精一杯で、病人や負傷者は、そのまま戦場に置き去りにしなければならなかった。生き残った私たちが養便にまみれ、暗闇のなかを撤退したのち、後方のジャングルのなかで、しきりに自爆する手榴弾のさく裂音がこだましていた。昭和十八年二月七日の夜であった。

太平洋戦争参加苦勞体験記

愛知県 大山 宏

昭和十三年七月第一回動員召集を受く(中国)。

昭和十八年第二回動員召集により赤道をこえ南下、西部ニューギニアに派遣され、敵襲と病魔になやみ九死に一生をえた私は幸か不幸かわからぬまま帰還し、昭和二十一年六月、生まれ故郷で家族の一人となって現在に至る。

我が部隊は野戦自動車廠、勢第一六四〇二部隊、内地召集兵六百人、中国派遣よりの現役兵混入の六百人を以て、千二百人の一個部隊を現地で編成した。

— 崇める神は生きている骸骨 —

氣候風土に恵まれないニューギニア島は原始的人間のすむ島であった。われらは未開ともいえる文化のないこの地に送られた濠洲作戦の要員である。無暴きわまりない戦略の犠牲者だ。上陸後、戦況は悪化の一途である。